

親子支え“連鎖”断つ

学力^{つて}なに

29

「たことがうれしい」と喜ぶ。

経済的事情などで学習塾に通えない中学生らを支援する取り組みが昨年、沖縄市で始まった。

NPO法人・エンカレッジは市内学習塾の賛同を募り、就学援助を受けている家庭の中学生らが自己負担なしで塾に通える仕組みをスタートさせた。企業や個人などの出資でつくる基金から、月謝が援助される。

坂晴紀代表(三)は「経済格差が学習機会や意欲の格差につながっている。厳しい家庭の子が希望を持って学び、将来の選択肢を広げられる仕組みにしたい」と話す。現在、自身が経営する塾で三人を受け入れている。

一人の母親(三)は「徐々に成績が上がりに、やる気が出てきた。何より表情が明るくな

進む二極化④

沖縄市のNPO法人・ことも家庭リソースセンター沖縄は、子育て家庭の悩み相談や就労支援に取り組む。松島はるか事務局長は昨年、ある母子家庭から相談を受けた。

派遣社員として働く母親は「自分は仕事ができないと思われている。来年は契約してもらえないかも」と語り、二人の子どもの教育費や将来について不安を漏らした。

中二の長女の相談にも乗った。「このままじゃ高校にも行けない」。成績不振で、何事にも自信が持てない様子だった。だが、何度か話を聞くうちに心を開き、長女は将来の夢を打ち明けた。

「お金がなくて塾に通えないけど、本当は通訳の仕事がしたい。こんな成績じゃ無理かな」

それから約三カ月、松島さんらがボランティアで英語、国語、数学を教え、長女は徐々

に学習意欲を取り戻した。

松島さんは「高校中退でシングルで車の免許もない。そんな子育て家庭は珍しくない」と説明する。親の自信のなさを反映し、最初から「どうせ自分は駄目なんだ」とあきらめている子が多いという。「どんな境遇でも、夢をあきらめないで済む仕組みをつくりたい」と力を込める。

子ども家庭リソースセンター沖縄の與座初美理事長は

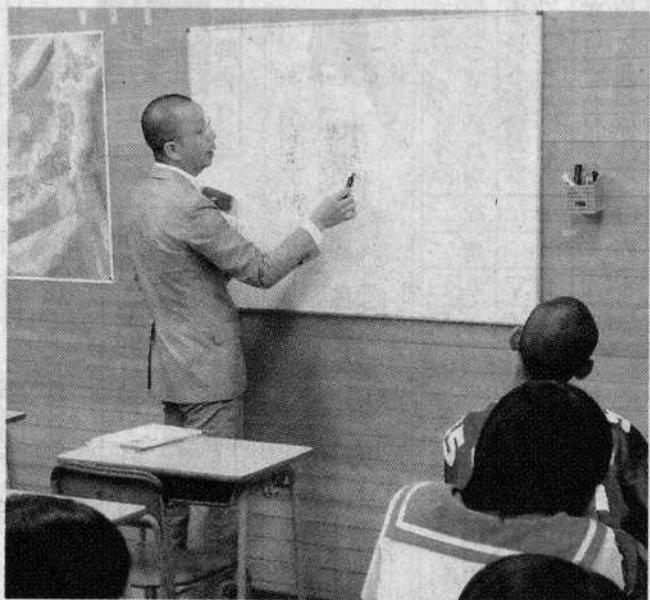
「負の連鎖」をどこかで断ち切る必要がある。厳しい状況の家庭に育っても、普通に進学し、なりたい職業に就ける社会にしなければならぬ」と訴える。困窮家庭で育った子どもが学校を辞めて、無職のまま未婚の母になるなど、親と同じような家庭を再生産する傾向にあることを懸念する。

「早寝早起き朝ご飯が大事なのは分かる。でも、それができない家庭を責めても何も解決しない。親子の自立を促し、支援する取り組みが必要だ」

(学力問題取材班)

|| 木 | 日曜日連載

物心両面でNPO連携



学習塾で勉強を教える坂晴紀さん。NPO法人で基金をつくり、就学援助を受ける家庭の子を受け入れている